

## 1．はじめに

私の勤め先には毎年、小・中・高の現職の先生方が百人ほど大学院に入学してくる。彼ら現職院生は、大学を卒業してすぐ進学してきた大学院生（学卒院生）とともに、フルタイムの大学院生として二年間学び、また現場に戻っていく。

このような二種類の大学院生がいることを活かし、それぞれの大学院生の学びを豊かにしつつ実践的な力量を向上させるべく、現在、大学として新しい活動に取り組んでいる。ここでは私の関わった事例に基づきながら、その一端を紹介したい。

## 2．マルチコラボレーションによる実践力の形成

実践力を高める質の高い学びのためには、大学に閉じこもるのではなく、学校現場の現実に触れながら学習する機会をつくり出すことが有益だろう。しかしそれによって学校現場の負担が増え、学校本来の教育活動に支障を来してしまうのでは意味がない。

大学院生が学校現場に赴いて学ぶことが、受け入れる学校にも有益になるためにはどうするか。頭を悩ました末、それぞれの学校の課題への取り組みを支援する活動そのものを、大学院生の学習活動とすることにした。学校現場に密着した活動を通して、大学院生側は実践的な力量を高めることができ、学校現場側は大学教員や大学院生の助力を得ることによって、自らの教育活動をさらに充実させることができるというわけである。

このアイデアが、文部科学省の「資質の高い教員養成推進プログラム(教員養成G P)」(全国の大学のなかから教員養成や現職教育の特に優れた教育プロジェクトを選定し、重点的に財政支援を行うもの)に採択され、平成十七年度から二年間にわたってプロジェクトを実施してきた。

このプロジェクトを実施するにあたり、まず、大学の近隣の学校で取り組んでいる課題をリサーチし、そこから大学が支援可能なものを選定した。次に、選定した課題に精通した大学教員を中心に、大学院生を加えた支援チームを作った。そして、学校現場の了解を得たチームが学校に赴き、その学校の先生方と協働しながら課題に取り組んだのである。具体的には、小学校の英語学習、国語学習における特別支援、ICTを利用した学力向上、活動的・体験的理解を図る数学カリキュラムの開発など、合計で十二の課題に取り組んだ。

プロジェクトの原理を「マルチコラボレーション方式」と名づけ、参加する大学院生は現職院生と学卒院生の混合とした。「コラボレーション(=協働)」とは、異質な者の協力によって新たな力や成果を生み出すことであり、「マルチ」は、「多数、多面的」という意味の接頭語である。つまりこの方式は、大学教員、現職院生、学卒院生、プロジェクトに協力してくださる学校の先生方という立場の異なる者による「多面的な協働」を通して、新たな力や成果を生み出そうとするものなのである。

## 3．K中プロジェクト

マルチコラボレーションの実際はどのようなものだったのか。私自身の関わった「K中プロジェクト」の事例の概略を見てみよう。

平成十七年度のK中学校では、生徒会役員や各種委員会の委員長、級長や班長など、リーダーとなる生徒の育成に取り組んでいた。その活動の支援がK中プロジェクトである。

プロジェクトの実施にあたり、大学チームが学校に入り込み、学校現場の文脈にそぐわないことを一方的に押しつけるのではなく、生徒たちの状況を理解するとともに、先生方の願いや思いを共有した上で、先生方と協力しながら課題に取り組むという方針で臨んだ。

その方針に従い、教室に長時間入り込んで生徒の様子を観察し、担任の先生方の話を聞くことから始めた。続いて、生徒の全体的な状況を把握するために質問紙調査を行い、その分析結果を先生方にフィードバックした。その上で、リーダーを育成に向けた実践案をいくつか提案し、それらをたたき台に先生方と話し合いながら実際の授業を組み立て、実施した。これは、「理論」を現場に適用するのではなく、学校の現実のしくみを探り、そこで見いだされたことに対応していく、いわばアクションリサーチ的な方法である。

このプロジェクトによって、お互いの実践を交流させる場が生み出されたり、大学チームから新鮮なアイデアが持ち込まれたり、人的資源が増えることで生徒の活動を細かくフォローできたりといったメリットが、K中学校の先生方にもたらされたようである。

また、大学チームにも次のような利益があった。現職院生は、実践のなかに理論を見だし、それを実践へとつなげるアクションリサーチの考え方を実感したり、学卒院生との協働によって、忘れかけていた「理想を追い求める精神」を取り戻したりできたという。一方、学卒院生は、現職院生などとの協働を通して、「教師としての思考様式」を学んだり、授業場面以外での教師の仕事を経験したりできたそうである。

#### 4．第二期K中プロジェクト

大学の人間が学校現場に入り込むことは、学校から忌避されがちである。しかし、K中プロジェクトは好意的に受け入れていただけたようである。幸いにも、次の平成十八年度の途中に、K中の先生方が積極的に新たなプロジェクトの実施を要請して下さった。

先生方との話し合いの結果、学校全体のリーダーとなる生徒の育成という課題は継続する一方、一年部の先生方から、総合的な学習の時間のさらなる充実という課題が提出された。それを受け、大学チームの大学院生メンバーを一新して、第二期K中プロジェクトを開始した。以下、紙幅の関係上、一年生の活動のみについて紹介する。

一年生は、総合的な学習の時間でキャリア学習に取り組んでおり、生徒は職業調べを行ったり、自分たちの地域にあってほしい職種などについて考えたりしていた。先生方はさらに、職業や仕事のリアルな姿に触れ、自分自身の将来に対する豊かな展望を抱くことができるようにさせたいと願っていた。

生徒たちの様子を把握するために授業を参観し、担任の先生方の話もおうかがいした上で、大学チームの現職院生たちは今後の授業展開に関するアイデアをあれこれと考えた。それらをもとにして三つの授業案を作成し、一年部の先生方に提案した。そして、先生方と話し合いながら、「K中『THE 仕事』ギャラリー」という授業を立案したのである。

その授業は、さまざまな仕事をしている人々のポートレートを集めた『職』という写真集（橋口穰二）に触発されている。授業の中心は、生徒が班ごとに仕事場に足を運び、働

く人から直に話を聞くとともに、その人々の様子を写真に撮り、写真をもとにお互いの経験を伝えあうという活動である。K中ではもともと、職業に関するポスターセッションを予定していたため、写真を素材にしたポスターという方向に発展させたのであった。

授業の方向性は決まったが、働く人の写真を撮るにはどうしたらいいか。デジタルカメラやカメラ付き携帯電話の普及で、カメラに親しんでいる生徒は多いものの、そのほとんどは単なる記念写真であり、他人に情報や思いを伝える写真ではない。また、写真を用いると、技術的な側面だけではなく、プライバシーなどの倫理的な問題も発生する。そのため、プロの報道カメラマンに写真の指導をお願いするというアイデアが院生から出された。つてをたどって地元紙に依頼したところ、幸い引き受けてもらうことができた。

また、生徒の訪問先も問題である。まずは、生徒が自分たちの住む地域にあってほしい職種について考えていた学習成果を参考に、大学チームが候補をリストアップした。そして、K中学校の先生方の意見もうかがいつつ、大学チームが商店街や水族館、ホテルや駅、病院やショッピングセンターなどと交渉し、最終的には十三カ所から協力を得ることができた。生徒の班は全部で二十で、一つの訪問先に一つないし三つの班が赴くこととなった。

## 5. K中「THE 仕事」ギャラリー

まず手始めに写真を撮る練習をした。各班に一つずつデジタルカメラを貸し出し、先生や事務の方など校内で働く人を撮った。そのときに撮影した写真は、報道カメラマンの方にいろいろと教えてもらう題材として利用することにした。

次に、報道カメラマンのお話を生徒全員でうかがった。実際の報道写真を提示しながら、シャッターを押せば誰でも写真が撮れるが、もっとも大切なのは、何を伝えたいか、伝えるにはどうしたらいいかを、状況に応じて自分の頭で考えることだと熱く語った。その後、撮影担当の生徒だけを集め、生徒が撮った写真をもとに撮影の具体について指導した。その他の生徒は、インタビュー担当、記録担当の二つのグループに分け、それぞれの役割について大学チームが指導を行った。カメラマンの話聞いた生徒の感想からは、写真には撮影者の思いが詰まっていること、撮り方の違いで被写体の印象が大きく変わることに驚いている様子がうかがえた。

いよいよ仕事場への訪問である。K中学校の先生に加え、大学チームのメンバー以外の大学院生も動員し、各班に一人以上の大人が同行して生徒をサポートするとともに、訪問先での生徒の様子を記録した。訪問先では、二時間という短い時間ながら、働く人々の仕事の様子を見学して写真を撮り、仕事の内容や仕事への思いなどを聞き取っていた。緊張してうまく質問できない生徒もいたようだが、大多数の生徒は役割を果たして帰ってきた。

生徒は、撮ってきたたくさんの写真から、自分たちの経験をもっともよく表現している二枚を選択した。それを大学チームがA3判に引き伸ばして印刷し、ポスターのメイン素材とした。その他の写真はL判で出力し、そのなかからポスターに利用するものを選定した。K中学校の先生方の指導のもと、コメントを書いた紙や写真を黒い大きな模造紙にはり付け、班ごとにポスターを作成した。ポスターができると、見たり聞いたりしたことをもとに口頭発表の内容を考え、発表の練習をしてポスターセッションに臨んだ。

レイアウトを工夫したものやコメントを工夫したものなど、さまざまなポスターが武道場の壁一面にはられ、発表する班とそれを聞く班に分かれてポスターセッションが開始さ

れた。生徒たちは、他の班の発表を聞いて、自分たちが訪問した場所だけではなく、さまざまな仕事の様子とその人々の思いに触れられたことも大いに興味深かったようである。

写真を指導した報道カメラマンも来場し、写真が進歩していることに喜んでいて。以前の写真はすべて横位置で、撮影の意図が分かりにくかったのに対し、今回は対象に応じて横と縦を使い分けたり、下からのアングルで撮ったりなど、表現したいものに迫っているという。また、生徒の写真にはまったく手を加えていないと伝えたところ、たいへん驚いていた。というのも、撮影した写真の不要部分を取り除いて構図を決めるトリミング作業をしたのだらうと思わせるくらい、すばらしい構図の写真が多かったからだそうである。

大きく引き伸ばす写真として生徒が選択したものに、ピンぼけでブレている写真があった。大学チームは、他の写真がよっぽどよかったのだらうなどと考えていた。ところが、ポスターセッション当日、仕事の様子がよく表現されている写真を生徒に投票させたところ、そのピンぼけ写真が上位にランクされたのである。しかもそれは、いい写真として報道カメラマンが選んだものにも含まれていた。カメラマンは、単にきれいな写真ではなく、構図を工夫し、伝えたいものをきちんと伝えようとしている写真がいいという。その思いは、私たちよりも生徒のほうがしっかりと受け止めていた。

## 6. おわりに

今回のささやかな試みを通して、分かったことや気づいたことがいくつもあった。まず、大学側の知識や時間、人材や予算といった資源によって、学校現場の負担が軽減されつつ、生徒の豊かな学びが成立する協働がありうることが示された。実際、生徒たちは今回の取り組みを通して、働く人に直接出会うことで、仕事の厳しさとともに、やりがいや責任感を持って働いていることを実感する一方、保護者に対する目が変わったり、自らの将来について思いをはせたりしている様子が見て取れた。

また大学院生は、実践案の作成に向けて資料を調べたり、議論したり、訪問先との交渉のなかで地域の人々の思いに触れたり、実践のなかで生徒の戸惑いや成長を目の当たりにしたりなど、大学だけでは提供できない学習機会を数多く享受していた。特に現職院生にとって、学校の外から学校に関わる経験は、学校の内部にいた自分自身を振り返る機会になったようである。生徒と教師との関係のあり方をはじめ、学校内での情報伝達や外部との協働のあり方など、これまでの自分や今後の自分について改めて考えさせられたという。

さらに、生徒の訪問先との交渉では、子どもに出会いたい、さまざまなことを伝えたいという地域の人々の思いに気づかされた。生徒の訪問後に返送くださったアンケートによれば、記録や表現の手段として写真を用いることに対しても好意的な意見が多く、仕事のありのままの姿を子どもに知ってほしいという願いがうかがわれた。

その一方で、訪問先からのアンケートのなかには、生徒に直に接し、マスコミなどと言われている中学生の姿とは異なることに驚いたという声もあった。各種の調査では、学校のことをよく知らない人ほど学校に批判的であることが示されているが、地域の人々に生徒の生の姿を伝えていくことの大切さを感じさせられた。

課題も残されているものの、今回の試みは、学校現場と大学の新たな関係の一つとして位置づくだろう。設置が準備されている本学の教職大学院のカリキュラムにも、マルチコラボレーション方式を反映させ、学校現場と大学をともに豊かな学びの場にしていきたい。